

「ミサの説教」

主任司祭 吉池 好高

秋分の日も過ぎて、さわやかな日々となりました。心に力を得て、ともに豊かな実りを勤めてまいりましょう。秋の深まりとともに、ミサをより深く味わうことができるよう、心感覚を研ぎ澄ましてまいりましょう。

ミサの式次第に従って、前回はみことばの祭儀の福音朗読まで見てまいりました。今回は、それに続く説教と共同祈願を見てゆくことにします。カトリック教会においては、説教の奉仕は叙階の秘跡を受けた奉仕者に委ねられています。宗教改革以降のプロテスタント教会においては、説教の務めは全ての信徒に開かれています。誰でも参加している会衆のために説教をする権利と義務を持っています。カトリック教会においても将来、信徒に説教の権利を認める日が来るかも知れません。そのような将来に備えて、今から説教の練習をしておくのも悪くはないことでしょう。そうすることによって、今の司祭によって行われている説教により注意深く耳を傾けることができるようになるかもしれません。

説教はそれが理想的になされるなら、福音のみことばの適切な説き明かしとなり、ミサへの心構えをより確かなものとする効果が期待できます。けれども、ミサの説教は、それを司祭や助祭の人間的な努力の産物です。彼らは長い年月みことばに奉仕できるための準備を重ねています。しかし、みことばの理解そのものは、説教者の人間的な限界を帯びたものです。自分なりのみことばの解釈をそれぞれの説教者は語ることとなります。それは説教というよりは、みことばの分かち合いに近いものとなるはずで、これなら、全ての人にとって、そう難しいものではなくなることでしょう。むしろ、そのような分かち合いのほうが、みことばを現実に即して受け入れてゆくためには有効であると思われ、司祭や助祭だけが説教の権利を持っているのは、叙階の秘跡がそれを基礎付けているからです。自分が説教をするつもりになって、前もって、当日の朗読箇所を熟読してみることをお勧めします。きっと、新たな気づきを得る恵みを味わうことができることでしょう。